
神の微笑み

下り坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の微笑み

【Nコード】

N0631Q

【作者名】

下り坂

【あらすじ】

神を目指した実直な人間の物語。

彼の滑稽な生き様をどう評価したらいいのだろうか？

(前書き)

前半はあえて客観的に箇条書き風に物語は進みます。その意味をとらえてくれれば幸いです。

私は神になりたかった。どこまでも超越したみなに敬意を受けるに値する人物になりたかった。このように思い始めたのはいつからだろう：

子どもの頃は無理のない子ども心からヒーローにあこがれた。私もいつかはヒーローになりたいと思い、TVのヒーローものの子ども向け番組を好んで見ていた。小学校に入ると徐々に現実を知り始めるもそれでも私はヒーローにあこがれていた。たとえば友達から馬鹿にされても意地を張って頑なにヒーローにあこがれた。ところが教養が増え、神という概念を知ると神にあこがれ始めた。神は様々な宗教に、様々な伝説にいる。それぞれの神は人間をはるかに超越して人々に多大な影響を及ぼしている。私が神にヒーロー的なものを見出した。そして私はいつしか神を目指すようになった。

中学生になり、さらに現実を知っていった。私は普通の人間であって奇跡を操れるわけでもなく、他人よりなにかしらのアドヴァンテージがあるわけでもないことを認識する。だが私はあきらめなかった。まずは人として上へ上へ目指した。よってまずは学業と素行において優等生になろうと必死になった。努力の甲斐あって好成績を残していた。とはいえ目指すは人智を超えた神、このままでは満足できない、あくまで通過点に過ぎなかった。

高校に入ると未知の世界を様々な本から学ぼうとした。私は貪欲に知識、教養を自分のものにしようと己を磨いていた。学業と素行はすでにコツをつかみ親教師の教えがなくとも十分に理解できている。うぬぼれではなく、確信するだけの自信があり、そして結果を残していた。よって私は大人から見て「手のかからない子」で幾分

の自由な時間が与えられた。その時間でとにかく本を読んだ。本を自分なりに解説することは煩わしくなく楽しかった。いつしか読書に没頭し人と話す機会が減っていった。

私は自他共に認める変わり者だった。だが私はそれに満足している。普通にしては神になれないと思っっているからだ。しかし、私の目指す道は真っ暗で見通しが悪過ぎた。いつも手探りで、これでは間違っていないのか、と自問自答を繰り返すほど未知の世界へ向かっている感覚があった。周りは気楽なもので私の噂をとにかくするも私にはそれに構うほどの余裕がない。私は神になるために試行錯誤ばかりしてもがいていた。

高校二年生になると自分を省みては明確に未来を見据える者が増えていった。一方で何にも明確なものに向かない者もいる。傍から見れば私はその中に入っていただろう。とりあえず大学にはいこうと思う者の混じって隠れながら神を目指した。

私は独りでいることが多かった。独りでいることは気楽ながらも常に不安がつきまとう日々だった。それは孤独からくる不安で非常に恐ろしかった。私はこの本能に響く不安を耐えることはできなかった。そして私はまだ神に遠く及ばないのだから今は甘んじておこうと友達をつくろうとした。神という孤高の存在は強い精神力を備えなければならぬことに多少の絶望を感じながら、神とは全く違う人の群れに入っていた。後々になって仲間を持つことはとても心強いことで精神的に強くなることと実感する。また一方で、この安心は私の価値観を脅かすものでもあった。

高校三年生になるとくるべき大学入試という未来に苦しめられる同級生が多くなった。私は絶え間なく学業に励んでいたため、さほど焦りを感じなかった。私は友達に不用意に「なぜ前々から勉強し

なかったんだ？」と聞いた。友達はさも当たり前のように、「勉強はつまらないし、他に楽しいことが多いから」と言われた。私はそう言った友達が少しうらやましく思いつつ、同時に私の心に灯り続けている炎に風が吹いて、揺らめいた。

大学入試を無事に終える。第一志望の「良い」と評される大学に合格できたので成功だったと言っているだろう。親、親族の皆も揃って喜んでくれた。この時、なぜか私は不信感に似た恐怖を抱いた。「お前はやればできる子だ。」という両親の言葉をとにかく嫌った。うぬぼれてはあらぬ方向に押されていく気がして恐かった。

大学に入ると一人暮らしを始めた。私は独りで暮らす心細さを痛感した。やはり私の心は脆いことを自覚し、悲しかった。そしてたまに遊びにくる妹がとても心強く感じるのが私のプライドも揺るがした。そして私は今まで知らずに家族から心の平穏をもらっていたことに感謝し、また自分自身を叱咤した。

大学生活は融通がきく。言い方を変えれば自由が増えたということだ。自分のことは自分で判断し決めなければならないので、今まで培ったモラルが試される。ゆえに私は慎重に考えた上で行動した。しかし、同級生の多くは知ってか知らずか恐れずに次々に行動していく。私だけが遅れをとっている気がして不快だった。私も何か行動しようとするのも思うようにいかなかった。何も他人を真似する必要はないと言いつつも一抹の不安は拭えない。私は変わり者であることを悩み始めた。

二十歳になり成人になる。子どもの制約と特権が無くなったわけだが、私を含め多くの者はたいした変化がなかった。一方で一部の者がどんどん非難されていくだろうと予見した。その後、噂で非難されていく一部の者のことを聞いた。彼らは社会的に「悪い」と

言われる者達で私は彼らが非難を浴びることに安堵を覚えていた。もしかしたら二十歳をいうのは分岐点なのかもしれない。今まで培ってきた自分が世界に適合するか、しないか、わかるのだから。

私は上手にはぐれている。変わり者がはぐれるのは簡単だった。変わり者たる所以はやはり神になりたい思いがそうだろう。では神は一体何なのかを考えると不思議なことにその姿はぼやけてはつきりしなかった。神に近づこうと強い思いはあるも未だつかめていないし、近づくことさえできていない気もする。そもそも神になる方法は確立されているはずもないのだ、正しいか間違っているか判断できない。手探りで歩んできた私の道はまだまだ手探りのままだった。

就職活動という新たな競争が始まった。私自身すべてを評価されるわけだがそれは都合が悪かった。なにしろ私は神を目指す変わり者で他人からおかしいと言われても仕方がないし、社会適正という点で良くない影響が十分に考えられる。案の定、私の評価は低いらしくなかなか内定が取れなかった。

私は本が好きだったので文系を歩んできた。しかし、最初に決まった内定は意外にもS Eの仕事だった。一応パソコンの基本的な知識は一通り知っているし、普段から活用しているがそれだけで内定がもらえるとは思えない。一体私のどんなところを評価してくれたのか知リたかった。その後、とある製造業の会社から内定をもらえたが、私は始めに内定がもらえたS Eの仕事に決めた。

卒業までの間、さらに時間に余裕ができた。みんなは時間を豪快に遊びに使っている。私に「こんな遊びするのは今しかないんじゃない、だから楽しんでおこうぜ」と言うあたり全体的な雰囲気があると言わせるのだと感じた。わからなくもない誘いにほどほどに付き

合いながら、私は図書館に通っている。元々小説を借りるために通っているがこの時は目的が違って、SE関連の知識を得るために通っていた。会社の研修教育を疑うわけではなく純粋な興味からだっただ。そこには新しい世界が広がっていて私は久しく忘れていた興奮を感じた。今まで神になるために試行錯誤ばかりして、勉強も神へ近付くために割り切っていた。ここにきてようやく神を意識せずに新しいことに踏み出せたと思った。

いざ会社に入社すると時間を無駄にしない研修プログラムが待っていた。研修は辛くも楽しめた。楽しめたといったら不謹慎になるかもしれないが私は純粋に楽しいと思った。なぜなら多くのことを学べるからである。とはいえ仕事は激務だった。心の片隅で神へのあこがれがくすぶり続けるも仕事では発揮することはできずにかすんでいく。このことは私を不安にさせたが激務が不安を忘れさせてくれた。

相変わらずの手探り状態にいる。神になるには一体何をすればいいのだろうか、このままではいけない気がしている。考えた末に一度有名になって認められることがいいのでは、と思った。しかし、それは容易ではないし時間に追われる今は難しい状態であった。

社会人になって二年目を迎える。同期の仲間達も各々の考えで自分の理想を追い求めていた。それらが会社の中に収まらなければならなかった。会社内の各々の考えはぶつかり合うも会社にいる限り一つにまとめ誰かが譲歩を余儀なくされ、それがストレスとなってすべての人に降りかかっていた。無論私も、だった。もしかしたらみんながみんなある意味で自分自身に神を見ているのかもしれない、ふとそう思った。

私にも後輩ができた。私のチームでも一人、新たに後輩が加入し

た。彼は私の教えたことを必死に吸収しようとメモをとって頑張っている。その勤勉な姿を見て、ならば、と思い私はできるだけのことを丁寧に教えた。順当に彼は成長していったが同時に手を抜くことを覚えた。気持ちがたるんでしまったのだろうと、人間ならば仕方がないと思って少しは目をつぶる。そんなある時、たるみ過ぎて目に余ったので注意した。彼はまずいと思ったらしくすぐに謝った。その場はそれですぐに収束したが、後になって聞いたところ「先輩は厳しすぎる、僕は先輩のようににはできない」と打ち明けられた。私は喜びを感じたが同時になぜか悲しくもあった。

会社の通達をある上司は何も説明せずに指示のみをする。またある上司は自分のエゴを含めて指示してくる。人を通して物事を伝える場合はどちらの方がいいのか考えてみたがはっきりした答えは出なく、バランスとケースバイケースで違うのだと感じた。それを判断するにはその人の力量が問われるとも感じる。これに連想して神は絶対で答えをはっきりと出せるのかを考えると同様にはっきりと一つの答えは出ないのでは？と疑った。

久しぶりに実家に帰った。自室が懐かしい。私は新社会人としてよく働いてきたと思う。そんな私に妹は「社会人ってそんなに頑張らないといけないの？どうしたらそんなに頑張れるの？」と聞いてきた。私は「生甲斐があるから」とだけ答えた。妹は納得しなかったようだが、感心したような、あきれたような顔で私を窺って見ていた。

私はできたばかりのグループ会社に異動することになった。ある先輩が推薦してくれたらしく少し嬉しかった。チーム内で、後輩はうらやましそうにしている。同期は悔しそうにしている。先輩は悲しそうにしている。私はそれぞれの違いにどう対応すればいいか困惑した。いよいよ異動になるとみんな一様に別れを惜しんでくれた

が、それぞれの内に秘めた気持ちバラバラなことを思うと不思議だった。

妹が大学入試のため私の所に居候に来た。何校も受けるためにしばらく居座るらしい。私は仕事が忙しくなかなか家に戻れないので別に何とも思わず一向に構わなかった。しかし、いざ妹が家にくると、部屋がだんだんと妹好みの内装に変わっていき、たまに帰れば違和感があつて仕方がない。そのうちに私の心まで変えてしまわないかと考え過ぎると怖かった。そんなことはないと思いつつもなぜか恐怖は拭えない、過敏になり過ぎているからだろうか。

私は仕事に流されていた。気づいてはいるが現状を変えることは困難であつた。それは神になりたい思いが錆つくことを意味している。

息抜きのために有給休暇をとって実家に帰った。久しく部屋を遊ばせていたので大がかりな掃除を試みた。初心を取り戻すにはちよいどいい具合に昔の日記が出てくる。手を止めて日記を開くと、神に近づこうと必死だった自分がいて自然と笑みがこぼれる。ふとこの笑みはなんだろうと考えた。浅はかな自分を笑ったのか？浅はかな？それとも情熱を思い出して微笑ましかったのか？…私は自分を見失っている気がした。

とにかくも、仕事をしなければ生きていけない。会社に縛られながらも働いていた。考えたところで時は一向に過ぎていった。

ある世界のニュースは独裁者を非難する趣旨で放送している。彼が神であろうか？私の見解では「神と認める」と強要しているに過ぎなく、断じて神ではない。強要しては偽りの神でしかないと思っている。強要できないから難しいのだが…。

神のことを学ぶために宗教に入ろうかと考えたがその宗教の神をバカにしてしまう気がしてやめる。神をそのように軽々しく扱うのには抵抗があった。この時、私の考える神は少なくとも安い扱いはされないと客観的に思えた。私の考える神：私は重大な過ちを感じ、思い直そうとした。とはいえ言うてどうすることもできないし、何もならない。ただ迷っていることを再認した。

私はまず他人に尊敬されようとしてきた。一応その成果は少なからずあらわれている。しかしまだまだ気は抜けない。ここで傲慢になってしまえば瞬く間に尊敬の念は失われることはわかっている。うぬぼれずにもっと前に進み続けなければならぬ。今はただ己の神経を疲弊させながら前に思った方に行くしかない。

正月、親戚付き合いもほどほどに実家で体を休めていた。母は私のそのつのない行動に満足している。一方父は何とも言えない複雑な表情をしている。そして父に「お前はつまらない奴だ」と言われる。言われた直後は気にも留めなかったがなぜか忘れられなかった。心の中で何かが引っ掛かっているようで複雑な気持ちだった。

私は神になることを諦めかけていた。せめてなるべく神に近づければ、という思いに妥協し始めた。それ程先が見えなくてまいっていた。神は元々人間だったという宗教があるが私にはそういった神をとて信じられなくなっていた。むしろ異常にさえ思えた。

仕事中、私が他社を訪問している際、古い友人に偶然出会った。彼はPCの精密機器やシステムを販売する営業をやっているようだった。これも何かの縁と思いい仕事が終わったら一緒に酒を飲む約束を交わし一度別れる。そして仕事が終わって再び会って昔話に花を咲かせて飲み合った。彼は昔から音楽をやっていて今でもその情

熱を忘れられないと言っていた。「お前はどうかんだ」と話を振られたので私は神になりたいことを打ち明けた。予想通り彼は笑った。予想通り？ 予想できたことは私にとって神を目指すことと相反していた。

宗教を立ち上げようかとも考えた。しかしそれは容易ではない。容易ではないから洗脳や騙しのテクニクを用いた、悪質な宗教が後を絶たないと思っている。それに「私は神だ」と言ったところでやはり滑稽にしかうつらないだろう。無神論の世界では無謀なのかもしれない。かといって無神論の中でしか神は目指せないのだから難しい。

同期が独立した。私も誘われていて行くか行かないか迷っていた。このまま今の会社に埋もれていく感じが嫌だし、創業していくことはどんなものか興味もある。だが同時に不安も大きい。うまくいくとは限らないし、おそらく相当な激務と苦労があるだろう。何より今まで尊敬を集めてきたことが失われる気がすることに恐怖した。今の尊敬されるという感情のバランスを失いたくない、慎重な私は誘いを断った。

恋人はいつも私を気にかけてくれる。私が変わり者ゆえに心配なのだ。私が神を目指していると言うたびに彼女は愛想笑いのような、困ったような表情をする。だんだんとなぜそういった表情をするのか分かり始めていた。そして彼女に謝罪と感謝をせずにはいられなかった。

妹が就職活動を始めた。SEに興味があるらしく私にSEについて詳しく聞いてきた。「なぜSEになりたいんだ」と聞くとどうやら私に影響を受けて興味をもったらしい。変わり者の私を見て本当にためになるのだろうか、私は妹に考え直すように言ったが聞か

かった。少しだけ私は変わり者ではなくなった気がした。

友人が不幸な事故で亡くなった。ビル火災に巻き込まれてしまったのだ。友人に非はなく、また唐突だった。私は悲しさが溢れてどうしようもなかった。葬式に出席すると皆故人を偲び、ある一体感があった。私は悲しみの他方で不謹慎ながら危険な集団心理が働いているのでは、と思い恐怖を感じた。もしかするとこう思うことも死の恐怖の一部なのではと思うほどだった。

会社が軌道に乗ってきて事業展開を始めた。そして私は早くも課長代理に出世した。部署が増え、他者との付き合いも増え、私は様々な出会いの機会を設けさせて戴いた。またチームの中心としてまとめていかなければならなかった。それらは苦勞が増すものであるが同期からはただうらやましそうに妬まれた。私はその感情が同期自身を苦しめていることに気付き切なさを感じた。

両親に結婚を勧められ始めた。私はもうすぐ三十歳になろうとしていた。長く付き合っている恋人にも結婚したいことをほのめかされていた。結婚を考えると…なぜか私はためらってしまう。自由がきかなくなるからだろうか、神を指すには不都合だからだろうか、一番の理由は普通の人間らしいという世間的評価が嫌だからではないか、と他人事のように考えていた。そうこうしているうちに結婚を勧める圧力は増えて、それに耐えかねて私は結婚を決断した。

妻との生活は思った以上に幸せだった。幸せすぎるくらいだった。互いに支えあって、思いやりをかけあって生活出来ていると思う。妻は昔から思ったことをはっきり言ってくれるし、理解もよくしてくれる。私も負けじとできるだけ逃げずに受け答えて理解しようと努めた。よって夫婦関係は良かった。だがこのぬるま湯のような幸せは私を不安にさせないでもなかった。別に不幸を望んでいるわけ

ではないが…。

私の後を追うように妹も結婚した。つまり私に義弟ができたわけだが彼とは互いに遠慮し合いよそよそしくなりがちだった。このままでは気まずいままで良くないと感じ、二人で食事でもして話せたらいいかなと思いつきその機会をうかがっていた。それは意外に早く訪れる。私が妹宅を訪れた時に始めは妹夫婦ともに揃っていたが妹が何かの用で出かけていき彼と二人きりになった。好都合と思っていたいろいろと話しかけてみる。しばし話をする素の彼は随分と印象が違って落ち着いた好青年だった。そして彼は自分のことを人見知りと言う。また、大勢でいると気を遣いすぎて固まってしまうと弁明し私はそれに相槌をうった。こう話すことができて私は嬉しかった。この人間のコミュニケーションをとった時の安心感に、妙な人間心理に酔った。

父が定年を迎えた。盆に実家に帰ると父は急に老けこんだように見えた。だがとても穏やかな優しい表情になっていた。私は口数の少なかった父の苦労を垣間見た気がした。

私も人の親になろうとしていた。妻が身ごもったのだ。妻が産休を取り始めると私はいよいよ真つすぐにしか進めなくなった気がした。最早私だけの人生ではない。

仕事は順調で会社は拡大し安定してきた。私は管理職の仕事の比重が増え、気がつけば仕事内容が入社当初から変わり果てている。ここにきて少し気が抜けてしまいそうになるが妻の出産が控えているので働かなければならない。私は妻と子どもを思って安産を祈りたい気持ちになった。即座に神を目指している私が、何も宗教に入っていない私がどの神に祈りたかったのか自分を不思議に思った。

父の危篤の連絡が入った。私は車にお腹が大きくなり始めた妻を乗せて夜道を走っている。新しい命があれば消えさる命もある。当り前のことだが私たち人間はいつも命に振り回されるのだな、と実感せずにはいられなかった。実家に着くとなんとか父の最後に立ち会うことができた。父は視点が合わないまま私の名を呼ぶ。そして父の最後の言葉を聞いた。その言葉は「強く生きろ」だった。

無事に息子が生まれた。初めて見た息子は人間とは思えないほど小さくて焦る。恐る恐る抱いてみても私が父親とは実感がわからなかった。戸惑っているだけだろうか。

世界はどんどん変わっていく。私のS Eの知識はすでに時代遅れになりつつある。ただ私の仕事は管理職であってS Eの仕事から一歩引いたところにある。もちろん最低限の知識は必要であるし私自身それを理解し絶えず勉強してきた。だが私はもうプロフェッショナルではないのだ。それよりもこれからの管理職として経営を学ばなければならなかった。つまり私は会社で働くために変わらなくてはならなかった。

私は体調を崩した。始めはただの風邪かなと思ったがそうではなかった。病院での精密検査の結果入院が必要なほどのものだった。私は疲れていたものでこれで休めるとホッとした。

貯金はそこそこにあった。以前に小さなアパートを建てていたので定期的な収入もありお金の心配はない。もちろん労災もおりていた。私は気兼ねなくベッドの上で静かな時を過ごしている。それも自分で止まったわけではなく止められたのだ。久しぶりに歩みをとめてゆっくり出来て新鮮な気持ちだった。しかしこうも病気になる自分がいかにただの人間であるか実感した。なぜかわからないがそう思ってしまった。幸い早期発見だったので命に別条はなかった。

私は会社に復帰するも私の居場所はるか遠くに追いやられていた。特に悲しみも絶望も感じなかった。私は人事部の一員として新たなスタートをきった。

時代はとにかく歩み続けている。会社は好調不調を繰り返し、社員はたびたび振り回されながら頑張っていた。そんな中重大な事件が起こる。社長ら幹部が法律に触れることをしてしまったのだ。一気に世間からの風当たりが痛烈になり、それにもなって労働環境はひどくなり社員は次々に会社を去っていく。ある者は独立した。ある者は転職した。では私は：

私は未だ会社の古株として頑張っていた。しかしながら苦労ばかり押し寄せてきて私の心は幾度も折れて精神的にまいっている。誰のために、何のために頑張っているのかと聞かれれば「家族のため」としか言えなかった。私はこの「家族のため」という言葉にすがりついていた。ふと、幾多の神は一体誰に微笑んでいるのか気になった。

私は再び体調を崩した。どうやら前回の病気が後をひいたらしい。母や妻はとにかく心配しているが、私はなぜか樂觀気味になっていた。入院は長期にわたるらしい。

息子は母に預けている。実家で元気に育ってほしいと願うばかりだ。私はやることもなく窓から見える風景をいつも見ていた。考える時間は増え、その内容は専ら神はどこにいて何をしているか、だった。

妹夫婦が見舞いに来てくれた。二人とも私を見て驚いた様子だった。聞くと私はいつも難しそうな顔をしていたが優しい顔に変わった。

たと言う。私は父を思い出さずにはいられなかった。変な強がりから私は病気でやつれたからだと言い返した。

体全体に痛みが走りだした。私はもう永くないことを悟った。

今日もベッドから上半身を起こして窓の外の風景を見ていた。妻は傍らで丸椅子に座っている。ふいに私は妻に声をかける。

「ごめんな」

「何よ、急に」

「もう謝る機会なんてないような気がしたから」
「気まずい空気が流れる。」

「俺は最後まで神になれなかった、なれる気すらなかったよ」

「またその話なの」

妻はうんざりといった感じだった。

「ずっと神を目指してきたから、神ってなんだろうと思いつながら。でもようやく諦めることができたよ」

妻は少し驚いたようだった。

私は今までしつこく神がどうだと言ってきた。様々な神を様々な角度で見つめ追い求めたつもりだ。だがどれも納得がいくほど神に近づけなかった。

「俺は神という幻想を抱いていたことによりやく気付いたよ。きつと神を目指すことで心の隙間を埋めていたんだ。俺の目指す神はあこがれのヒーローで不自然なくらい完璧な奴で全く人間らしくなくて、だから追っても追っても行き着けなかった」

妻は黙って私を見つめ、話を聞いている。

「神なんて目指さなくて良かったのだな。今まで何をムキになっていたのかわからないくらいだ。随分と無駄な人生を送ってしまったよ」

妻は首を振った。そして惚れ惚れしそうな優しい微笑みをうかべて切り返した。

「無駄なんかじゃない」

私は予想外のことに驚いた。

「あなたは気づいてないかもしれないけどね、『神はこんなことしない』とか『神らしくない』とか言ってあなたは自分に厳しかったのよ。それは結果的にあなたを良い方向に導いていたと思う。そのくせ他人には優しくてみんなに慕われていたじゃない。なかなかできないよ、自分に厳しくて他人に優しくすることは。あたしはそんなあなたが好きなの。変わり者でもそれを含めて全部わかった上で好きになったんだから、だから、無駄じゃない」

思いがけない妻の言葉は私を驚かせた。そして私を震わせた。

「俺は：俺で：良かったのか、こんな俺でも：」

「そんなあなたでも私にとって唯一の人だから、だからそんなに自分を責めないで」

涙が溢れた。

私は幸せであった。幾多の苦しみを味わった人生であったが幸せだったと言える。父に遺言の「強く生きろ」に対し私は何と答えればわからない。しかし、私の人生に悔いはもうない。だから安心して父の元へ行ける。もし、父に「強く生きたか？」と問われるならば私は「よくわからない、でも幸せだった」と胸を張って言うつもりだ。

私は人間を全うした。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0631q/>

神の微笑み

2011年1月15日21時41分発行